

## 『本が死ぬところ暴力が生まれる』

☆『本が死ぬところ暴力が生まれる—電子メディア時代における人間の崩壊』(バリー・サンダース著、杉本卓訳、新曜社、一九九八年)

高橋 大助

国学院大学

識字とは、たんに文字が書いて読めることを意味するわけではない。本書の著者・サンダースの言葉を借りれば、それは「批判的分析と判断の道具となること」によって、人に力を授ける」ものだ。すなわち、反省して選択できる、過去と未来にまたがった存在をこそ、識字者と呼び得るのである。

だから、アメリカの学校教育が数多く生み出している非識字者は「後悔と罪悪感の欠如」した存在であり、彼らは識字者とは違う力に頼って他者と関わろうとする。銃が彼らの「筆記具」となるのである。日本でも、銃でこそないが、ナイフが「筆記具」として用いられた事件がある以上、これは必ずしも他国の問題と

してかたづけられはしないに違いない。

この識字の危機に対して識字教育の強化をもつて臨んだのでは事態を悪化させる、とサンダースは警告する。なぜなら、読み書きに苦しみ、学校から流出してゆく子どもたちには、識字化の前提となる「口承世界」での体験が欠落しているからである。

サンダースの言う、子どもたちの「口承世界」とは、識字化以前に母の乳房やおとぎ話・物語などによって用意される「評価を下されたり非難を受けたりする恐れなしに子どもたちがのびのびと想像力を発揮できる場所」である。そこでの体験は子どもたちに「自己」の素型とも言うべきものをもたらす。それはまた何